外邦図の再発見

中村和郎
日本国際地図学会会長
元日本地理学会会長
駒澤大学名誉教授

「目が眩む思いだった。」　外邦図を初めて手にとってつぶさにこれを見た学生達が新鮮な驚きをこんな風に表現した。本初子午線がグリニッジでない経度があるとは思ってもいなかったし、山地の等高線が谷の奥で切れていてそこに「雲」と書いてある地形図は、雲が晴れるのを待って空中写真測量をするだけの余裕のない戦時中の地図製作事情を表していると想像された。

駒澤大学の倉庫のような部屋には、故多田文男先生から寄贈されて長い間未整理であった大量の地形図や海図が眠っていた。これらの地図こそ貴重な「外邦図」であると知ったのは第４回外邦図研究会が駒澤大学で開かれた 2003 年 11 月のことであった。その重要性を強く認識したのはこの会に出席した学生諸君であった。博物館学の太田喜美子先生のご指導を仰ぐと、先生はすぐにこれらの地図が地理学のみならずほかの分野の研究者にとっても大事な資料であることを見抜かれて、紙の劣化対策とともに、研究者がいつでも利用できるように目録作りをする必要性を強調された。これがきっかけになって、駒澤大学マップアーカイブズとよぶ自発的なグループが作られた。博物館学実習の時間に外邦図を教材として学ぶだけでなく、太田先生ともども合宿をして『東北大学外邦図目録』に負けない目録作成を目指した。「東北大学にもない地形図があった」という喜びを味わいつつ、今年度もまた継続している。

私達はこれらの地形図の中に多田先生直筆の書き込みがある図幅を見つけた。それは昭和 15,16 年に多田先生が隊長となって実施された東ゴビ砂漠の踏査のときに、おそらく事前に作業をされた地形図であろう。淡い色で丁寧に等高線段彩が施され、図枠の外には几帳面な字で次のような書き込みがあった。「NNW-SEE ノ tectonic line アルモノノ如ク　コノ方向ニ侵食谷アリ　・山ハ old maturity 乃至 old stage トナル、峠ハ低イ、skelton ノ如キ山ナリ　・〇〇[不明]タル岩山ガ山麓迄現ハル、蒙彊ナドデハ中腹マデ、朝鮮デハ頂上ダケ・・・・砂丘ハ少イ、北東部ニアリ　砂丘ハ下盤ノ性質ニヨルノダロー・・・」

同じ踏査に参加したほかの隊員もまた、切峰面図や段丘面区分図を作成したり、集落の分布を報告したりしている。軍事的目的で作られた外邦図が、戦前にこのように学術的目的に利用されていたことを知ることができた。

外邦図研究会の精力的な調査によって、外邦図が国内のみならずアメリカ議会図書館やクラーク大学などにも所蔵されていることが明らかにされている。それだけでなく、台湾については施添福教授が、韓国では南榮佑教授が既に詳細な解説書を出版されていて、研究会との交流が生まれているという。

外邦図は広くアジア太平洋地域を中心とする19世紀末から20世紀前半にかけてのかけがえのない史料である。当時の農村集落や都市の状況、植生や耕地など、景観の分布をこれだけ広い範囲にわたって知る手がかりはほかに得られない。命がけで測量した人たち、必死に戦後の焼却処分を免れようと努力した人たちに感謝したい。精度の問題があるにせよ、衛星画像と比較して激動の時代におけるこの地域の景観変化を明らかにすることも可能ではないかと想像してみる。そのために学際的かつ国際的なプロジェクトを立ち上げることが期待される。

(『地図情報』25 巻 3 号 2005 年 11 月より)